

「第一回国際中国医学史会議」に出席して

平成四年八月十九日から二十二日まで、中国北京市において表記の学会が開催され、出席する機会があり、一人の日本医学史会員として報告する義務があると思われるので、印象記を述べておくこととする。

まず、筆者のもとに届いた開催案内書や応募の方法についてのペーパーをみると、顧問団に、錢信忠氏、我が国では矢数道明先生、シピン、ウンシュルド氏など九名が名を連ねられていた。

実際に出席した日本の方々には筆者以外では次の三名の方々であった。

滝川巖氏（東京・世田谷）、初日の開催セレモニーで壇上に昇られ、公用語に日本語も加えるよう挨拶された。中国中医研究院の趙教授の『中国古代医学史』を訳されている（未刊）。

橋口親義氏（大坂・西淀川区）、「日本の漢方医学的精髓―我が臨床経験について」発表される。

吉田荘人氏（京都・左京区）、台湾から見えた哈鴻潜教授の

「台湾医学史的初歩報告」を補足した「台湾医学教育の先駆者、杜總明先生の業績」を発表された。氏は最近、中央公論社より『中国名医列伝』（中公新書）を出版されている。

日本より来た四名はいずれも案内が個人的に送られて来たといっている。

公用語は、中国語・英語のみで、橋口・吉田氏は立派な中国語で、筆者（演題、中国医学と道教）は、発表内容をそのまま中国語スライドとし英語で発表した。

会長にあたる方は、有名な中国中院研究院、中国医史文献研究所長李経緯教授で、すべてを取りしきられていた。

会場は、宿泊したホテルより離れた、東直門医院のとなり、京東賓館という場所で、昼食をもふくめて、すべてホテルとの間をマイクロバスで往復した。

十八日は登録、十九日午前中開催式と冒頭に李経緯教授の歓迎スピーチとがあり、つづいて一部発表があった。このなかにも、これまた有名な、台湾の那琦教授の「本草学の書の変遷」についてや、ウンシュルド博士の「銀海精微と中医眼科学」についての発表があった。シピン氏については出席者名に入っていたが、とうとう顔を見ることが出来なかった。当夜は、我々のホテルで盛大な宴会があり、さきの李経緯・那琦・ウンシュルド氏等と同席し、友好を深めることができた。アメリカ・ドイツ・フランス・台湾を初め中国でもチベット・モンゴル・新疆ウイグル地区などからも集り、中には民俗衣裳をまとっていられる人もいて、盛会であった。

筆者をふくめた日本人三名の発表は三日目の午前中に行われたが、現地に着いて初めて発表の日時・順序も分った次第であった。

筆者の発表は、この方面の研究が未だ乏しいためか反響があり、あまり他の演者に質問がなかったのに、李経緯先生御自身が質問して下さったのは光栄であった。筆者の本の台湾・韓国版について中国版も出る予定だと言ったところ、それについても発表後、多くの方から尋ねられた。筆者のフィロドのみで恐縮だが、次のような方々の発表があったことを報告しておきたい。

中国養生史略（唐宗儒氏）、論服石療法及其応用価値（王道坤氏）、中医与養生之道芻議（劉仁祥氏等）、道家「養生」与中医「養心」保健說探蹟（張冰氏）、氣功淵流与中医仏教道教之關係（党瑞佛氏）、唐代諸帝服食丹藥初探（曹麗娟氏）、禪宗対明清医学的影響（張福利氏）、唐宋道教与医学（祝業平）、中医道学研究（朱明氏）、中国古代封建意識形態対両生養生的影響（廖果氏）など数多かつた。

その他、小數民俗の医学史、日本への中医学伝播、鍼灸医学の西洋への伝播などの研究もあった。

暑い折でもあったが、中国各地より来られた方は熱心であり、中国での医学史のすそのひろがり（李経緯氏によると、中国中医院中、医史研究室は一〇〇近く、文献整理研究所は一〇箇所あまり、各省の医史学会は一五を算え、研究者は八〇〇人近く、古医学文献研究生は一〇〇余名、そのうち博士研究生は一〇余名いる

という）を知った。

最終日、二十二日午後は、会場となりの東直門医院の鍼灸外来の見学（日本からの鍼灸実修生に多数あつた）、ついで中国医学院の図書館と中国医史博物館を見る。貴重な参考となる多くの出品があり、いろいろと教えられるところが多かつた。我々も、中国医史にさらに関心をもち、多くの研究者が参加して、外国との交流の場をもつべきであることを痛感し、このような機会をとらえて積極的に発言すべきだと思つた。簡単だが、思いつくまま記して報告としたい。

（吉元 昭治）

日本医史学会神奈川地方会発会総会

日本医史学会神奈川地方会は神奈川医学会の一分科会として、発足し、次のような会合を行つた。発足総会には蒲原理事長ほか日本医史学会の役員の先生方の御参加を得て盛大であつた。

とき 一九九二年五月一六日（土）午後三時～六時

ところ 横浜市健康福祉総合センター

一、発会総会

二、特別講演

「和英語林集成」よりみたへボンの医療

大島 智夫

三、懇親会

（杉田 暉道）